

1. ◎医聖永田 徳本(ながた とくほん)先生について (平成23年12月12日現在)

混迷の戦国時代を世のため人のために生きた、医聖、薬草の大家

◎牛にまたがり「一服18文」と書いた薬袋を首にかけて診察に出掛け、貧者に無料で薬を与えて人々を助けました。

◎1625年に將軍秀忠が、大病にかかり多くの名医がいろいろな薬をすすめても効果がなかったのですが、ふすま越しの猫の脈を見事ごと見破り、医聖徳本先生の処方する薬でたちまち全快したそうです。薬代は一服18文の計算で受け取ったので、ますますその名を挙げました。

◎三河出生説に拠れば、源義朝を討ちとった長田親政の子孫である長田重元の弟とされ、先述の秀忠重病時の秀忠側近(書院番)であった永井直勝(重元の息子、改姓)の叔父に当たる。

◎待医の女中3人の逸話、資料・種、江戸に持たせました。

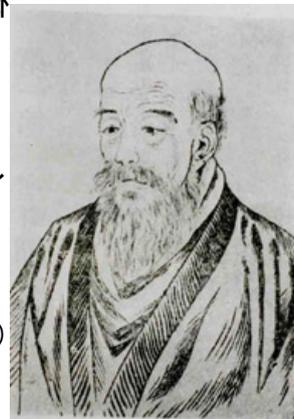
◎かかりつけの娘さんのお葬式から一命を救いました。

◎山野をめぐる薬草を採取しながら研究したために、植物学にも精通し、ぶどうの接ぎ木や挿し木、棚づくりの方法を発明して村人に教えたのが、今日の甲州ぶどうの隆盛につながっています。諏訪の花梨の伝説もあります。

◎友人林信時の子である、若き日の林羅山を弟子としていたが、羅山の非凡なる素質を視て他の職に進むように勧めたとされる。

◎1630年に **118歳**の長寿で長い生涯を閉じました。平成25年**生誕500年**。

◎お弟子(約50人)の一人に徳仙、子孫に現岡谷市長



● プロフィール

1513年(永正10年)

大浜に生まれる。愛知県。

1521年(大永元年)～1531年(享祿4年)

常陸の鹿島に行き、僧残夢を師として、神仙吐納(呼吸のこと)を学ぶ。

後玉鼎に従って良医として名高い月湖道人(明の帰化人)に医術の奥義を受け。古河の田代三喜について医術を学ぶ。

甲斐の武田信虎(信玄の父)の所に滞在する。

1541年(天文10年)

信濃の諏訪郡東堀村に移住する。

御子柴家に滞在し、その娘と結婚する。

1582年(天正10年)

京都の名医、曲直道三らと往来する。甲斐に帰る。

1625年(寛永2年)

徳川二代將軍秀忠の大病を平癒させる。

1630年(寛永7年) 2月14日東堀村で死去。



2. 永田徳本の藍塔(らんとう)

徳本先生は1630年(寛永7年)に118才で亡くなったといわれています。



真中が永田徳本のお墓

拡大した永田徳本のお墓(藍塔)

人生の最後は岡谷に住み、東堀の尼堂墓地に葬られました。

長年の間に墓石はでこぼこになっていますが、削った石粉を薬として飲んだり、痛いところに擦り付けると病が治るといわれました。イボが治ったお礼は石の倍返しです。

3. 徳本峠

徳本は「とくごう」と読む。峠を越えた上高地の一角に徳吾の小屋があったことから、ここへ至る峠という意味。徳本上人がこの峠を越え峠路の開発にあたったという説。徳川将軍吉宗の付き医者徳本(とくもと)という人がいた。吉宗が病気になったとき、彼がこの峠へきて薬草を集め、それを将軍に献じたことから「徳本」の字が当てられたという話など。徳本峠の文字が正式に地図に記載されたのは大正になってからのようだ。それ以前において「とくごう」とは徳郷のことであり現在の明神館のあたりに徳郷の小屋が何軒かあったようだ。徳本峠遊歩道は梓川の支流・島々谷と上高地との間を結ぶ。

4. 徳本水

徳本上人の遺跡にあるこの名水は井戸水より冷たく、味噌のしこみに使う味噌がかびない、飲むと歯痛が治るといった評判や胃薬にとの節があり、県外からも汲みに通う人も多い。



5. 徳本稲荷

本堂の背面には徳本稲荷という稲荷社が接合している。

江戸初期の甲斐国の名医、永田徳本を祀った神社。

永田徳本は貼り薬「トクホン」の由来になった人物。



6. 著書

『梅花無尽蔵』、『徳本翁十九方』、『医之弁(いのべん)』、『知足斎医鈔(いしょう)』
『薬物論』、『診脈論』、『望診術』、『知足斎十九方』、『灸治法』

※ 南無阿弥陀仏 念仏徳本 (1758~1835)